

葦原中国の主神をめぐって

神 田 典 城

記紀神話のなりたちを探るうえで、重要なポイントの一つとして、色々と論じられているものに、アマテラスとタカミムスヒ（注1）の関係という問題がある。すなわち、天孫降臨に関連する神話群において、高天

原の主神（普通には、天孫降臨の「司令神」といった呼び方がなされている）に、「古事記」、「日本書紀」の本文及び各一書の、それぞれの所伝の間で「揺れ」がある。

三品彰英論文第一卷（平凡社刊）より

日本書紀本文	日本書紀本文	異伝	要素			
			(イ)	(ロ)		
降臨を司令する神	降臨する神	る神	タカミムスビ	ホノニギ	真床覆衾に包まれた嬰兒	日向襲高千穂
降臨神の容姿	降臨地		タカミムスビ	ホノニギ	真床覆衾に包まれた嬰兒	日向襲高千穂
同伴する神々			タカミムスビ	ホノニギ	真床覆衾に包まれた嬰兒	日向襲高千穂
神器の授与	統治の神勅		タカミムスビ	ホノニギ	真床覆衾に包まれた嬰兒	日向襲高千穂

日本書紀 第四ノ一書	タカミムスビ	ホノニギ	真床覆衾に包 まれた嬰兒	日向襲高千穗 穗日二上峯	アマノオシヒ・アマク シツオホクメ		
日本書紀 第二ノ一書	タカミムスビ とアマテラス	アメノオシホ ミミ、後にニ ギに代る	虚空で出生し た嬰兒	日向穗日高千 穗峯	マ アメノコヤネ・フトタ 諸部神	神鏡の授与	
古事記	タカギノカミ とアマテラス	アメノオシホ ミミ、後にニ ギに代る	降臨間際に出 誕、ただし容 姿には特別の 記載なし	日向高千穗久 布流多気	五伴緒・アメノコヤネ・ フトタマ・アメノウズ メ・イシコリドメ・タ マノヤ・オモイカネ・三 タチカラヲ・イハトワ与 ケ・トユウケ・サルタ ヒコ・アメノオシヒ アマツクメ	三種神器の授瑞穂の国統治 の神勅	
日本書紀 第一ノ一書	アマテラス	アメノオシホ ミミ、後にニ ギに代る	降臨間際に出 誕、ただし容 姿には特別の 記載なし	日向高千穗 穂	五部神・アメノコヤネ・ フトタマ・アメノウズ メ・イシコリドメ・タ マノヤ・サルタヒコ	三種神器の授統治の天壤無 窮の神勅	

このような、所伝間の揺れについて論じられたもので、代表的なのは、三品彰英氏や松前健氏等のものである（注2）。本稿は、その事を論ずるのが主意ではないので、詳しくは、それぞれの論文を参照していただくとし

て、結論だけを記しておく、本来タカミムスビを中心として展開する話だったのが、後になって、アマテラスがその皇祖神化に伴って入り込んで来た、というのである（右の表で言えば、**右↓左** **旧↓新**という事になる）。

ところで、これら従来の論は、天孫降臨条を対象として行われているわけで、従って視野は、高天原世界に限られていた。しかし、葦原中国平定を司令する神が次の如くであるように、この「主神の揺れ」というのは、実際には、天孫降臨の前段をなす「葦原中国の平定」をも、ひとつづきに含んでいる。

高御産巢日神、天照大御神の命以ちて……

（古事記・葦原中国の平定）

高皇産靈尊、八十諸神を召し集へて……

（日本書紀・第九段本文）

天照大神、天稚彦に勅して曰はく……

（同右第一の一書）

高皇産靈尊、乃ち二神を還し遣して……

（同右第二の一書）

そして、その「葦原中国の平定」の部分は、高天原世界と出雲世界（葦原中国）という、二元的対立が基調となっているわけだが、この葦原中国の主神については、

右に挙げた、高天原世界に見られるような「主神の揺れ」といった観点からの分析は、あまりなされていないと言つてよからう。しかしながら、葦原中国の主神に関しても、所伝間の呼称の違いをはじめとして、色々と検討すべき点がある。しかも、注意深く見て行くと、高天原世界の主神の揺れに呼応するかのような、微妙な、所伝間の違いも見出だされる。そこで、高天原世界の主神の事を念頭に置きつつ、葦原中国の主神のあり方を見て行くこととしたい。

。葦原中国の主神の名称

高天原のアマテラス乃至タカミムスヒに対置される、出雲世界（＝葦原中国）を代表する神は、オホクニヌシ（大国主）の名を冠されている。

ところが、この神の呼称の現われ方が、所伝間で大きく異っている。

まず、「古事記」を見ると、系譜部分に、オホクニヌシの他、オホナムチ・アシハラシコヲ・ヤチホコ・ウツシクニタマという、五つの亦名が挙げられている。そして、オホクニヌシの一連の物語部分のうち、「国作り」のところまでを見ると、主人公の名は、主としてこれら亦名が用いられており（ウツシクニタマだけは用いられ

ない)、「大國主」の名は、それら別々の名で呼ばれる主人公が、全て同じひとりの神である事を確認するかの様に、要所要所に配されているに過ぎない。例えば、

大國主神の兄弟、八十神坐しき。(中略)其の八十神(中略)大穴牟遲神に袋を負せ(以下略)あるいは、有名な「神語」の中にも、

八千矛の神の命や吾が大國主
といった具合である。

そしてこれが、高天原から葦原中国へのアメノホヒの派遣以後、つまり、高天原と葦原中国との二元的対立を語る部分になると、種々の亦名は消えて、専ら「大國主」が用いられることになる。

これに対し「日本書紀」では、第八段第一の一書(系譜のみの短いもの)と、第六の一書(「古事記」に類似した、オホナムチの国作りを語る所伝で、「日本書紀」の中にあつては、孤立異文である)に、

此の神の五世の孫は大國主神なり、(第一の一書)

大國主神、亦の名は大物主神、亦は国作大己貴命と号す。亦は葦原醜男と曰す。亦は八千矛神と曰す。

亦は大國主神と曰す。亦は額國玉神と曰す。(第六の一書)

とあるだけで、他にオホクニヌシの名称は一切見られな

い。のみならず、右の六種類の亦名すら、ウツシクニタマが、第九段本文に一度用いられるだけで、あとは、本文と各一書を通じて、全てオホナムチ(大己貴命)の呼称が用いられている。

つまり、「日本書紀」にあつては、「大國主」という名称は、ほんの形式的に記されているにすぎない。

この、オホクニヌシとオホナムチだが、今見て来たような記紀での現われ方、また、オホナムチが、「風土記」や「万葉集」、更に、時代が下つて「古語拾遺」にも登場する、出雲を根拠地として、広く人々の信仰を集めていたと考えられる神である(注4)のに対し、オホクニヌシが、他の上代文献に見られない名称である事などから考えて、「大國主」というのは、オホナムチという、実際に人々の間で信仰されていた神格をもとにして、更にアシハラシコヲをはじめとする、他の各地方の有力神を統合して構想された、極めて観念的な呼称であると言える。(注5)

従つて、出雲世界の主神の成立には、「オホナムチからオホクニヌシへ」という図式が想定できる。(注6)

。葦原中国の主神の位置づけ

それでは、この「葦原中国の主神(以下の論では、煩

難になるのを避けるため、便宜的に、オホクニヌシの呼称を以て記すこととしたい。」の、葦原中国における立場はどのようなになっているか。それは、高天原側がどのように対処するかという事でもあるわけだが、各所伝において、高天原から遣わされた「国譲り交渉使」とオホクニヌシとの、交渉の状況は、それぞれ次のようになっている。

〈古事記・葦原中国の平定条〉

二はしらの神（「タケミカツチとアメノトリフネ」）出雲国の伊那佐の小濱に降り到りてへ中略へ大国主神に問ひて言りたまひしく、「天照大御神、高木神の命以ちて、問ひに使はせり。汝が宇志波祁流葦原中国は、我が御子の知らす国ぞと言依さし賜ひき。故、汝が心は奈何に」とのりたまひき。（中略）爾に答へ白ししく、「僕が子等、二はしらの神（「コトシロヌシとタケミナカタ」）の白す随に、僕は違はじ。此の葦原中国は、命の随に既に献らむ。（中略）亦僕が子等、百八十神は、即ち八重事代主神、神の御尾前と為りて仕へ奉らば、違ふ神は非じ。」とまをしき。故、建御雷神、返り参りて、葦原中国を言向けしつる状を、復奏したまひき。

〈日本書紀・第九段・本文〉

二の神（「フツヌシとタケミカツチ」）、是に、出雲国の五十田狭の小汀に降り到りてへ中略へ大己貴神に問ひて曰はく、「高皇産靈尊、皇孫を降しまつりて、此の地に君臨はむとす。故、先づ我二の神を遣はして、駆除ひ平定めしむ。汝が意何如。避りまつらむや不や」とのたまふ。へ中略へ（オホナムチが）二の神に白して曰はく、「我が怙めし子（コトシロヌシ）だにも、既に避りまつりぬ。故、吾亦避るべし。如し吾防禦かましければ、国内の諸神、必當に同じく禦きてむ。今我避り奉らば、誰か復敢へて順はぬ者有らむ」とまうしたまふ。へ中略へ「今我當に百足らず八十限に隠去れなむ」とのたまふ。言訖りて遂に隠りましぬ。是に、二の神、諸の順はぬ鬼神等を誅ひて、（一に云はく、二の神遂に邪神及び草木石の類を誅ひて皆己に平けぬ。其の不服はぬ者は、唯星の神香背男のみ。故、加倭文神建葉槌命を遣せば服ひぬ。故、二の神天に登るといふ。）果に復命す。

〈同右・第一の一書〉

時に二の神（『タケミカツチとフツヌシ』、出雲に降到りて、便ち大己貴神に問ひて曰はく、「汝、此の国を將て、天神に奉らむや以不や」とのたまふ。

へ中略へ大己貴神、其の子の辞『コトシロヌシ』天神の求ひたまふ所を、何ぞ奉らざらむや」を以て、二の神に報す。二の神、乃ち天に昇りて、復命をもて告して曰さく、「葦原中国は、皆己に平け竟へぬ」とまうす。

へ同右・第二の一書へ

二の神（『フツヌシとタケミカツチ』、出雲の五十田狭の小汀に降到りて、大己貴神に問ひて曰はく、「汝、將に此の国を以て、天神に奉らむや以不」とのたまふ。へ中略へ是に、大己貴神報へて曰さく、「天神の勅教、如此慇懃なり。敢へて命に従はざらむや。吾が治す顕露の事は、皇孫當に治めたまふべし。吾は返りて幽事を治めむ」とまうす。乃ち岐神を二の神に薦めて曰さく、「是、當に我に代りて從へ奉るべし。吾、將に此より避りなむ」へ中略へ故、経津主神、岐神を以て郷導として、周流きつつ削平ぐ。逆命者有るをば、即ち加斬戮す。帰順ふ者をば、仍りて加褒美む。是の時に、帰順ふ首渠は、大物主

神及び事代主神なり。乃ち八十萬の神を天高市に合めて、師ゐて天に昇りて其の誠款の至りを陳す。

以上、全て計四種の異伝を比較すると、見過ごしにできない異同があり、それは、次の二つのグループに分けることができる。

(A) オホクニヌシの服従の後、高天原の使神が、直ちに復命しているもの。へ古事記・第一の一書へ

(B) 出雲でのオホクニヌシの国譲り以降、更なる平定行がなされたとするもの。へ本文・第二の一書へ

この両者の違いは、つまり、(A)は、「オホクニヌシの服従」が、そのまま葦原中国の平定完了を意味しているが、(B)にあつては、「オホクニヌシの服従」だけでは、葦原中国全体の平定とはならない、という事にほかならないのであり、それぞれで、葦原中国におけるオホクニヌシの立場が、微妙に異っている事を示していると理解できよう。

すなわち、(A)の場合、「オホクニヌシの服従」『葦原中国の平定』となるのだから、オホクニヌシの意志が

そのまま国つ神たちの意志であり、名実共に、オホクニヌシは、葦原中国の盟主であると言える。一方、(B)では、オホクニヌシは、葦原中国の最有力な神であるのかもしれないが、葦原中国全体を掌握しているとは言えない。もし、オホクニヌシが、葦原中国の全き支配者であるなら、(A)の如く、オホクニヌシが国を譲る事を承諾しさえすれば、高天原からの使神による葦原中国の平定は完了する筈で、「諸の順はぬ鬼神等を誅」つたり、「岐神を郷導として周流きつつ削平ぐ」事が必要でない事は、言うまでもあるまい。

殊に、(A)のグループのうち、「古事記」で、高天原の使神がオホクニヌシに向かって、「汝が宇志波祁流（ウシハケル）支配する葦原中国」と言つて、明瞭に、オホクニヌシが葦原中国の支配者である事を、規定している事、また、(B)のグループのうち、「第二の一書」では、オホクニヌシが服従した後に、「逆命者」と「帰順ふ者」とがあり、更に、帰順した者のうちの有力神（オホモノヌシ）に、タカミムスヒが、

「汝若し国神を以て妻とせば、吾猶汝を疏き心有りと謂はむ。故、今吾が女三穗津姫を以て、汝に配せて妻とせむ。八十萬神を領めて、永に皇孫の為に護り奉れ」

と申しわたした事が記されているが、これなどは、オホクニヌシの服従が、実際には極めて個人的なものであつて、葦原中国の他の国つ神たちに対して、さしたる拘束力を持つておらず、有力な神の平定は、それぞれ別個に行われる必要があつた事を示しており、これらの例は、右に述べた私見を支持していると考ええる。

それでは、このような、オホクニヌシの位置づけの微妙な差違は、何をものがたつてゐるのだろうか。

前章で、ヘオホナムチ↓オホクニヌシという経過を見たわけだが、これを、いま少し言葉を足してオホクニヌシ成立の過程を考えるならば、

「山陰に現実に存在する出雲国の主神オホナムチ」

←

「葦原中国の支配者オホクニヌシ」

という過程が想像できる。（注7）

つまり、何らかの理由（注8）で、出雲国に信仰の中心を持つオホナムチが、天孫降臨以前の地上国土（葦原中国）の代表神という役割を負わされて、中央神話に取り込まれた（注9）わけだが、有力ではあつても、全日本的な規模（あるいは、中央としての大和朝廷の立場

からと言ってもよい）で見れば、ローカルな神であるオホナムチが、「汎地上国土的」な神格として神話体系の中に定着するまでには、ある程度の時日を要したであろう事、想像に難くない。

従つて、(B)のグループのように、出雲での国譲りの後、更に平定が行われるとする伝承は、「地上国土の支配者としてのオホクニヌシ（オホナムチ）」像が、熟し切らない段階の姿を示しているものだと考えられる。

そうすると、この事を手掛りとして、葦原中国平定の部分の各所伝の新旧を復元できるのではないだろうか。

(注10)

右に示した経緯から見て、概ね(B)↓(A)という事は、まず明らかであろう。

そこで、各グループごとに見ると、(B)のグループの、「本文」と「第二の一書」では、「本文」に較べ、「第二の一書」の方がオホナムチ以外の国つ神平定が、より詳しく具体的にあり、オホナムチの影響の及ばない地方神たちの存在を明らかに示している。しかも、本稿の引用では省略した個処になるが、オホナムチの引退後の処遇について述べた部分は、それと酷似した伝承が「出雲国風土記」に見られる、つまりは、出雲在地の伝承の吸収が、まだ生（なま）に近い状態で保存されている点も

併せ考えれば（注11）、地方神オホナムチの姿を、より濃く留めていると言えよう。

また、(A)のグループを見ると、「古事記」の方が、呼称の問題も含めて、全体として、構造的には最も完成された形をとつてはいるものの（前章）、オホクニヌシが、引退に当たつて、

亦僕が子等、百八十神は、即ち八重事代主神、神の御尾前と為りて仕へ奉らば、違ふ神は非じ。

と述べている。これは、逆に見れば、コトシロヌシの協力が無いと、逆らう者があるという事になるわけで、この記述は、(B)のグループの

吾此の矛を以て、卒に功治せること有り。天孫、若し此の矛を用て国を治らば、必ず平安くましましけむ。（本文）

岐神を二の神に薦めて曰さく、「是、當に我に代りて奉るべし。へ下略へ」へ中略へ故、経津主神、岐神を以て郷導として、周流きつつ削平く。

といったものと、通じるように思う。

勿論、比較すべき対象となる「第一の一書」のこの部分の記述が、極めて簡潔であるという事情も考慮に入れるべきと思うが（注12）、ともかく、現在見ることできる記述に従う限り、「古事記」の方に、「葦原中国の

主神オホクニヌシ」としては、未消化の部分を残すという事になろう。

以上をまとめると、葦原中国平定を記した計四種の異伝は、

第二の一書↓本文↓古事記↓第一の一書

という順で、出雲のオホナムチが、葦原中国の主神として定着して行くそれぞれの過程を示していると思われる。ところでこれを、本稿のはじめに触れておいた、高天原の主神の揺れと比較して見よう。

そうすると、高天原の主神は、

本文
タカミムスヒ（一神）

第二の一書
タカミムスヒ（一神）

古事記
タカミムスヒ・アマテラス（二神並立）

第一の一書
アマテラス（一神）

となっており、これを、「タカミムスヒ↓アマテラス」とする諸先学の研究成果に照らして見れば、

本文

第二の一書
↓古事記↓第一の一書

という事になり、右に述べて来た葦原中国の主神に関する私見と、よく対応している事がわかる。

つまり、葦原中国の代表者オホクニヌシの像は、アマテラスの皇祖神化が進むのに相応じながら、定着して行く

たという事が結論づけられるであろう。

ただし、「本文」と「第二の一書」の関係について、冒頭に掲げた三品氏の図表との関わりにおいて付記しておきたい。

図表によれば、「本文」と「第二の一書」の関係は、

本文↓第二の一書

ということになっていて、あるいは、私見と矛盾すると感じられるかもしれない。しかしながらこの図表は、そこでも述べたように、あくまでも「天孫降臨」の部分についての、要素の多少による新旧の分析であって、葦原中国の平定を含んではいない。

更に言えば、三品氏の表によれば、降臨の司令神の欄に、タカミムスビとアマテラスを併記してあるが、この「第二の一書」全体を通じて見るならば、葦原中国平定の部分では、アマテラスの名は全く登場せず、タカミムスヒとただ一神によっている。そして、天孫降臨となっても、アマテラスが出て来るのは、いよいよオシホミミを降すという所になつてからであり、しかも、タカギノカミ（タカミムスヒ）とアマテラスを繰り返し併記している「古事記」と違って、「第二の一書」では、タカミムスヒとアマテラスが併記される事がない。その意味では、高天原の主神に、二神が配されているとは言っても、

「古事記」の二神併立とは全く性格を異にしている。

つまり、「第二の一書」では、タカミムスヒを中心として展開している話の中に、唐突にアマテラスが登場しているところから見て、タカミムスヒからアマテラスへの、極く初期的な形を示していると考えられる。

そしてまた、ある神話体系が組まれる過程と、そこに用いられている個々の神話素の新旧とは、別の問題である。従って、本稿で問題にした、葦原中国平定の部分のように、専らタカミムスヒ一神で展開している部分に限って言えば、「第二の一書」と「本文」との新旧は、どちらとも言えないわけで、オホクニヌシのありようを手掛りとして、「第二の一書→本文」とした私見と矛盾することにはならないと考える。

。結語

以上、葦原中国の主神の周辺を探って来たわけだが、記紀神話体系の中で、アマテラスの皇祖神化の過程と、出雲のオホナムチ像の変化との間に、相呼応する関係のあった事が理解せられたと思う。

ただ、本稿では、論を急ぐのあまり、先学の諸論の紹介、また、関連諸事項に対する私見の表明を、大幅に略した点、誠に不備な論述態度と言わねばならない。殊に、

オホクニヌシと亦名の関連などは、極めて重要な問題であるのにも拘らず、既発表の拙稿等に頼ることが多くて、あまりに言葉が足りなかったと反省している。

いずれ近い機会に、それぞれ個別の問題について、卑見をまとめなおしたうえで発表することを約して、研究者諸氏の御寛恕を請う次第である。

(注1) 神名の表記は、記紀で異なるので、引用文中、及び特に必要と思われるもの以外は、カタカナで表記する。

(注2) 三品彰英「三品彰英論文集」収載の諸論文。松前健「古代伝承と宮廷祭祀」

(注3) 記紀の引用に際しては、岩波書店「古典文学大系」本の訓み下しに従った。但し、字体は概ね新字体を用いた。章段も大系の方式によった。

(注4) 拙稿「出雲国風土記の位置」(至文堂「解釈と鑑賞」五四年一月号)・松前健「日本神話の形成」・青木紀元「日本神話の基礎的研究」

(注5) 拙稿「ヤマトタケルとオホクニヌシ」(「学習院大学上代文学研究」第4号)

(注6) この問題は、極めて重要なもので、これだけで

は言葉が足りないと思うが、従来の諸研究に鑑みて、学界の常識と言つて良い見解と考える。

(注7) 「山陰に現実に存在する出雲国の主神オホナムチ」については、(注4)参照。

(注8) 諸論があるが、私見は、松前・青木氏等の見解(いずれも前掲書)に賛意を表する旨、拙稿(注4)に示しておいた。

(注9) 倉野憲司氏等の研究によれば、本来、天岩戸神話と天孫降臨神話とは、ひと続きであつたもので、現在見る記紀神話の形は、その間に出雲神話が割込まれたということであり、筆者も同意見。

(注10) 三品氏に、出雲神話の各異伝の新旧を論じたものがあるが(『出雲神話異伝考』『三品彰英論文集』所載)、筆者とは、視点・方法の全てが異っている。

(注11) 筆者は、記紀の出雲神話は、出雲在地の伝承が基層をなしているという立場をとっている。

(注12) 牽強付会を恐れずに言えば、簡潔と省略とは異なるわけで、簡潔であるのは、より、こなれたものである、とも考えられるのではないか。